

西川へレンさん

芸能界きつてのおしどり夫婦として知られる西川きよし・へレンさんご夫妻は、芸能界きつての大家族。三人のお子さんたちに加え、きよしさんのご両親、へレンさんのお母さんも含む大家族を切り盛りしてきた西川へレンさんに、家族のこと、介護のことをお伺いしました。

大家族の中の介護
助け合いの精神で
つながる四世代





PROFILE

【にしかわ へれん】1946年、米国人の血を受け継ぐ生粋の京都っ子として生まれ、裁縫の腕を持つ母親に女手ひとつで育てられる。1962年吉本興業に入社、ヘレン杉本の芸名でデビューするや看板女優として活躍。1966年、西川きよし氏と大恋愛の末、結婚、二男一女に恵まれる。現在、主婦業をメインとしつつタレント活動も続けている。また、実体験を踏まえた子育て、介護などをテーマに講演会活動も行っている。著書は『幸せの鐘がきこえる』（1986、ケント出版）『西川ヘレン & かの子のおいしい和風レシピ—秘伝のだしで元気になる（別冊主婦と生活）』（2002、主婦と生活社）、『ヘレンのもう、いや！—多重介護奮戦録』（2003、小学館）。

歌をきっかけに吉本興業へ

——ヘレンさんは京都のご出身ということですが、どのような子ども時代を過ごされたのですか。

ハーフということもあつてなかなか仲間に入れてもらえなくて、お外で遊ぶよりお家の中で遊ぶことのほうが多かったですね。母が和裁をしておりましたから、その傍らでままごとをしたりして遊んでいました。

母は、私が生きていくために何か身につけさせようと、いろいろなお稽古事をさせてくれました。三歳の頃から日

本舞踊やタップダンス、歌をやっていたんですよ。その中で続いたのがお歌のお稽古です。プロの歌い手だった叔母が、蓄音器を聴いたり、発声練習をしていた影響もあつたんでしょうね。

「黒い瞳のナタリー」とか「ビギン・ザ・ビギン」とかそういうものをよく聴かされていました。

一六歳のときに、音楽教室に入り本格的に勉強するようになって、そこから縁あつて吉本興業へ入りました。

——吉本興業というとお笑いのイメージで、歌や音楽と結びつかないのですか。

その当時、吉本興業ではミュージカルをやっていたんです。とは言っても、今の劇団四季のようなミュージカルじゃなくて、ポケットミュージカルと呼ばれるミニミニミュージカルです。上演時間が短くて、内容もコメディタッチになっている楽しいミュージカル。最初はそこに入れていただいたんです。

その後、吉本新喜劇の脚本家の方が「ミュージカルもいいけど、新喜劇はど

うか」と声をかけてくださって、お芝居に出るようになりました。

我が家より西川家に帰りたい

——ご主人の西川きよしさんとは、そこで出会われたのですか。

当時、吉本興業には大阪と京都で三つの劇場がありました。出演者も三つのグループに分かれて一〇日交代で各劇場をまわっていました。その中で、途中から主人と同じグループになったのです。

ある日の夜、大阪・梅田の劇場でお稽古していたときに、私が高熱で倒れてしまいました。先生が「西川、お前の家は近くだから、ちよつと横にならせてやれ」と言ってくださって、梅田から駅一つ先、中津にある主人の実家で休ませてもらうことになったのです。

突然のことだったにもかかわらず「どうぞ」と快く受け入れていただいた上、主人の両親も姉も皆が一生懸命看病してくれて、とてもありがたかったですね。

主人の両親も姉も皆が一生懸命看病してくれて、とてもありがたかったですね

主人の心の中に入って 一緒に頑張って いこうと思いました。



「ヘレン杉本」として活躍していた時代、舞台では歌も歌っていた

——西川きよしさんとは、もともと親しかったのですか。

同じグループの仲間というだけで、特に意識したことはありませんでした。私も修行の身で、お芝居の研究をしたりお稽古をするのに一生懸命で、それどころではなかったですから。

ただ、高熱でお世話になったのをきっかけに主人といろんな話をするようになり、主人の姉妹、兄弟たちとも親しくなって、大阪の劇場のときは西川家の家族のいるところに泊めていただくようになりました。

西川家は物質的には決して豊かではなかったんですけども、家族の絆やぬくもりといったものがあって、とても居心地がよかったですね。その雰囲気にならなくて、次第に母が待つ我が家よりも西川家に帰りたいなというようないきましました。

——「主人のどんなところに魅かれたのですか。」

本当にやさしくて、まじめで、仕事一筋というか、思ったら絶対にやり抜こうというあの目がね。それは今も変わりません。

辞めるなら、君が辞めなさい

——「結婚されたのはいつのときですか。」

二〇歳のときです。

——周囲の反対はありませんでしたか。

会社からも、母からも大反対されましたよ。

私はハーフとして生まれ、幼い頃はつらい思いもしましたが、吉本興業へ入ってから、それが幸いしたのか、すぐにレギュラー番組のお仕事をいただけたんですね。大阪の番組だけでなく、東京で財津一郎さんと歌の番組を一緒にさせていただいたり、随分と忙しくしております。かたや主人は先輩方もたくさんいらつしやる中、なかなか上に上がるのは難しかったです。

そんな状況の中、主人と二人で会社で結婚の報告に行き、私が「芸能活動を辞めさせてください」とお願いすると、「ヘレンはこれからもっと売り出そうと思っているので、辞めるなら西川くん、君が辞めなさい」と言われてしまつて。

——会社としては、売れっ子を簡単に手放すわけにはいかなかったのでしょうか。

主人は「僕が活躍してヘレンを食べさせていきますから、僕をここにおいてください。ヘレンを幸せにします」と必死で頭を下げてくれて。会社からは「君にはできない」と言われましたが、「頑張つて、絶対にやります」と宣言し、私は吉本興業を辞めさせていただきました。

——芸能界に未練はありませんでしたか。

全くありませんでした。私は表舞台に出なくても、主人の心の中に入つて一緒に頑張つていこうと思いましたが。

——結婚式は挙げられたのですか。

華やかな結婚式はできませんでしたが、先輩や親しい方々が集まってくさつて、お衣装も吉本興業の衣装部さんに借りて、真似ごとだけの式を大阪の今宮戎神社で挙げさせていただきました。

——内掛けに綿帽子？

いいえ。ウェディングドレスを着て、神社で祝詞を上げていただきました。

ないない尽くしのスタート

——新婚生活はいかがでしたか。

新婚生活と呼べるような甘いものではありませんでした。ないない尽くしの生活で、とにかく生きるだけで精



一杯でした。南こうせつさんの「神田川」のような六畳一間からのスタートです。主人もなかなか芽が出ませんでしたから。

——西川きよしさんという「やす・きよ」コンビで超売れっ子の印象しかないのが意外です。

主人は結婚と前後して新喜劇から漫才に転向したのですが、(横山) やすしさんとコンビを組んでも、すべて順調だったわけではなく、いろんなことがありました。「やす・きよ」として認められるまでに、かなり時間がかかりましたよ。

結婚してから現在まで、七回引っ越していますが、その都度、畳の数、柱、屋根瓦が増えて、主人の頑張りが少しずつ家族にも反映されていったという

感じます。

実母、義父母との同居へ

——西川家は大家族とうかがっています。ヘレンさんのお母さんと同居されるようになったのはいつですか。

実は、結婚に大反対だった母とはしばらく疎遠になっていました。結婚式にも出席してもらえないくらい。でも、子どもができてから、少しずつ元に戻っていききました。

大阪・住吉の公団住宅に引っ越してから次男が生まれまして、そこに母が手伝いに来てくれるようになって、次に移った大阪・堺の家から母と同居するようになりました。

——同居の提案はどなたが？

主人からです。私が母一人子一人でしたので、「お母さんと呼んでみたらどうだろうね」と言ってくれて、西川の両親や兄弟たちも賛成してくれて、母を呼び寄せました。

——その後、ご主人のご両親とも同居されるようになるんですね。

ええ。千里ニュータウンの一戸建てに移ったときから、主人の両親も一緒に暮らしています。

——ご主人は長男なんですか。

いいえ。主人は五人兄弟の一番下です。末っ子ですから甘えたかったでしょうし、时期的にもちようど義父が仕事を退職したので、それを機に主人の両親とも同居するようになりました。

——そこに、ご主人のお弟子さんもうらつしやるんですね。

弟子は多いときで五人くらい同居していました。ですから、全員合わせる一五人ほどが一つ屋根の下で暮らしていたことになりますね。

——ご自身の親と、ご主人の両親との同居ということで、気をつけられていたことはありますか。

何かあれば、私は真つ先に主人の両親に報告をするよう気をつけていました。そうすると、話は主人の両親を通じて、私の母に伝わります。これを、自分の母に先に話をもっていって、主人の両親が後で聞いたとしても気分が

何かあれば、私は真つ先に
主人の両親に報告をするよう
気をつけていました。

「夫婦だから、親子だから言葉に出さなくてもわかるだろう」じゃなくて、近い関係でも言葉は必要です。



悪いと思います。だから、嬉しいことも、悲しいことも、困難なことも、まず主人の両親から先に話す、それを一番に心がけました。

——でも、それだけの大所帯だとケンカになつたりしませんか。

人には感情がありますからね。小さなゴタゴタはたくさんありますよ。でも、それぞれがお互いを思いやるのが西川家のモットーです。

それから、何でもよく話し合うことです。例えば何か問題が起こっても、そのまま放置せず、その場できちんと話し合います。両親たちとも、主人とも、子どもたちともよく話し合つて問題を

解決してきました。うちでは、面倒だからと言って、もめごとをそのままにはしません。

「何でもよく話し合いながら、お互いが理解し合つて暮らす」という方針を決めて主人がリードしてくれたのが、大家族をまとめていく上での一番大きな力になりました。

——距離が近い関係ほどわがままになつたりして難しい面もあるかと思ひますか。

「夫婦だから、親子だから言葉に出さなくてもわかるだろう」じゃなくて、近い関係でも言葉は必要です。話し合わなければ、わかるものもわからない。すべて話し合いに尽きるのではないでしょう。

少しずつ 忍び寄る介護

——親の介護が必要になったときも、皆さんで話し合われたのですか。

できれば誰もが介護を受けたくはないですよ。でも、年を重ねれば病は寄ってくるもので、それを若い者がサ

ポートするのは当たり前のことです。今は当たり前じゃないのかもしれないけれど、私たち家族はそれを当たり前ととらえています。

ですから、介護が必要になったときも改めて話し合ったというより、自然に受け入れていったという感じです。家族皆が支え合い、助け合いの精神を発揮して、それぞれできることを手伝つてくれました。

——ご両親やお母さんは、身体的にどのような状態だったのですか。

主人の父は十二指腸潰瘍をはじめ、うつ病などいくつかの病気を長く患っていました。

主人の母は、若い頃に耳を患い手術したんですが、片方の耳は聞こえないまままで生活していました。

私の母はもともと虚弱でしたし、年齢とともにいろんな病気が出てきていました。

人間誰しもが年齢を重ねて弱っていく、そこから介護というものが始まります。私たちは親たちが五〇歳の頃から一緒に住み始めていますから、介護の前の段階から少しずつ慣れていました。

親が年老いて少しずつ弱っていくのと反比例して、子どもたちは成長して大きくなっていく。人間の自然な姿をお互いが見ているのです。



更年期障害に重なる介護

私は今、お祖母さんの立場で、孫が六人います。私がこれから弱っていく姿を子どもや孫たちは身近に見ていくことになるでしょう。なるべくそうならないようにとは思いますが、体の衰えを止めることはできません。そこを皆が理解し合って、自分もたどる道だと思うことが必要でしょうね。生きていけば誰しも年を取るわけですから。

——ご自身の体調は、いかがですか。

私は三三歳のときに卵巣のう腫を患って、三九歳で卵巣と子宮を摘出しています。そこから一〇年間、更年期障害で苦しみました。救急車でしょっちゅう運ばれるという状態に加えて、介護もありましたから、本当に大変でした。

——そのとき、ご主人はどういう時期だったんですか。

ちょうど議員をさせていただいていた時期ですね。金曜夜に東京から大阪に帰ってきて、月曜の朝、東京へ戻るような生活でした。大学生だった長男

自分の心をどう支えたらいいのかわからなくなって、実際に逃げ出したこともあります。

は東京で、高校生だった娘も留学でアメリカ、私だけが親の介護をしなくてはならない時期もありました。

その頃、主人の父はうつで入院を繰り返すうち、自宅で寝たきり状態になっていました。体が動かなくて寝たきりではなく、精神が崩れたことによる寝たきりです。

——更年期障害に介護も重なると、逃げ出したくなるときもありますよね。

ありますね。家族も親戚も周りの皆が支えてくれたんですけれども、自分の心をどう支えたらいいのかわからなくなって、実際に逃げ出したこともあります。

——実際に逃げ出したとは？

朝、パジャマのまま家を飛び出して、あてもなく車を運転しているうちに、京都・比叡山にあるホテルで「泊めてください」と言っていました。ホテルで一休みしているうちに夕方になって、「そろそろお台所に立たないと、皆がお食事できないな」と思って、結局、家に帰ったんですけどね。

今考えると、ホテルの方もパジャマ姿の女性をよく受け入れてくださったかなと思います。

——それほど追い詰められていたということですね。

ホルモンバランスが悪くなって、婦人科だけでなく、心療内科にも随分お



世話になりました。先生からは「介護には、自分で抱えられることと抱えられないことがあります。抱えられないことがあるなら、介護保険制度もできたことですし、一度役所で尋ねてみてはどうですか。デイケアかショートステイができれば、その時間を少しでも自分の時間に充てられますから」と、何度も勧められました。

——先生のおっしゃる通りですよ。
でも、なかなかそこまで踏み切るこ

親の介護は全部自分で
できるんじゃないかなという
気持ちが強かったのです。

とができませんでしたね。そんな私を見るに見かねて、次男夫婦が役所の窓口まで付き添ってくれたのです。

役所の窓口で担当の方に我が家の介護の現状を話してしましたら、何だか初対面の人を相手に父や母たちの悪口を言っているような気分になってしまつて…。困って相談に行っているわけですから、良いことを言えないのは当然ですよ。

ですが、そのことで、自分自身が何ともいえない嫌な気持ちになつてしまつたのです。話の途中で「この話はなかつたことにしてください」と涙をポロポロ流しながら、役所から飛び出してしまいました。

それからしばらく役所へ相談することはありませんでした。

家族が見守る中で迎えた最期

ところが、その後、私の母が大腿骨骨折で足が動かなくなり、どうしようもなくなつて、もう一度役所の窓口足を運ぶことになりました。

——一度ですんなりと役所を頼ることができなかったのですね。

よく考えてみれば、相談することは良いことなんですよ。でも、親の介護は全部自分でできるんじゃないかなという気持ちが強かったのです。

窓口で相談した結果、役所の方がケアマネージャーを決めて、ケアプランを作ってくださいました。

——お父さん、お母さんたちは受け入れてくださいましたか。

父や母たちは五〇歳代の若い頃から隠居して、西川家という小さな社会の中でずっと生活していますから、親戚や友人以外の人たちと関わることはありませんでした。

だから、初対面のケアマネージャーさんとの応対には戸惑っていました。主人の父は体調を聞かれても、「君がどうして僕にそんなことを聞くんない？」みたいな感じでしたし…。リハビリをしてくださるというので「ショートステイはどうですか？」と言ったら二人とも「ノー」だったんですよ。



家族皆が自然体で 元気に暮らせたら それが一番の宝物です。

——それほど家が楽しかったということでしょうね。

父や母たちにとって我が家に勝る居場所はないと思います。もし、私にもっと体力があつて、心がくじけなければよかったと思うんですけども。現実には、介護保険制度にだいぶ助けられました。

——お父さんやお母さんたちは現在どうされているのですか。

主人の父は「俺は絶対に家で死にたいんや」と言っていた通り、自宅で見守られる中、八九歳で亡くなりました。

私の母は大腿骨が折れた後も自宅で介護していたのですが、脳梗塞で入院し、九二歳で亡くなりました。脳梗塞が起きてからは一度も目を開けることはありませんでした。それでも毎日、家族の誰かが欠かさずお見舞いに行つて、ケアノートにその日の状態を書き込んでいました。

——最後までご家族の愛情に包まれていたんですね。

主人の父は、ちょうど今年の夏で七回忌を迎えます。

主人の母は現在九〇歳で、今年の三月から体調を崩して入院中です。これまで要支援でちよつとお手伝いするくらいの状態でしたが、退院してくれば恐らく第三の介護が始まるでしょう。

そして、次は私の番だと思っています。

——もし、ヘレンさんご自身に介護が必要になった場合、お子さんたちが看てくださると思いますか。

直接聞いたことはありませんが、たぶん自然に受け入れてくれるでしょう。なるべく介護されなくていいようにと思つてはいますけれどもね。

私にとっての一番の宝物

——行政のサポートを受けられてみて、不満などはありませんでしたか。

不満はありません。主人は議員をさせていただく前からずっと、ボランティアで拘置所、高齢者や障がい者の施設などへの慰問を続けています。私たち家族もそのお手伝いをしてきました。

介護施設を慰問すると、最近では男性の介護福祉士さんも多いですし、若い方も皆さん本当によく頑張つていらつ

しゃって頭が下がります。入所されているお年寄り一人一人に対して、尊敬の念を持ってきちんと対応されている。なかなかできないことをなさっているなと感心します。

——介護の現場では労働環境も厳しい中、皆さん本当によくやっていますね。

私は身をもつて体験していますから、皆さん素晴らしいと特にそう思いますね。

——最後になりますが、今後やりたいことはありますか。

今まで一生懸命にやってきましたので、何か大きなことをしたいというのではなく、家族皆が自然体で元気に暮らせたらそれが一番の宝物です。

——確かにそうですね。本日はお話しいただき、ありがとうございました。

(インタビュー…協会職員 篠田良子)

読者プレゼント

西川ヘレンさんの色紙を情報誌「ALPS」読者の中から抽選で2名の方にプレゼントします。ご希望の方はeメール、郵便、FAXのいずれかの方法にて下記宛てお送りください。

お送りいただく際には、住所、氏名、年代(〇〇歳代)、所属と併せて、弊誌への感想もお書きくださいますようお願いいたします。

なお、当選の発表は色紙の発送をもって替えさせていただきます。



(財) 地方公務員等ライフプラン協会
情報誌「ALPS」編集部
〒107-0052 東京都港区赤坂8-5-26
赤坂DSビル6階
E-mail : alps@lifeplan.or.jp
FAX : 03-3470-8759